

令和5年度 第1回清水区地域包括支援センター運営部会 会議録

- 1 開催日時 令和5年7月13日(木) 14時00分～15時45分
- 2 場 所 清水区役所 3階 第1会議室
- 3 出席者 (委員) 瀧委員、伴野委員、隅倉委員、中村委員、丸山委員、小高委員、  
佐々木委員、堀川委員  
(地域包括支援センター) 港北、興津川、両河内、港南、岡船越、高部、  
飯田庵原、松原、有度、蒲原由比
- 4 事務局 清水区役所清水福祉事務所高齢介護課 高齢者福祉係  
保健福祉長寿局地域包括ケア推進本部 地域支え合い推進係
- 5 傍聴者 0人
- 6 地域包括支援センターの活動報告及び意見交換

(1) 港北地域包括支援センター(以下、「港北包括」)

港北包括: 介護を担う世代へのアプローチ、周知活動について、昨年度までは対象者をどこに絞っていくかをいろいろと模索しながら進めていたが、講座を開催することが難しかった。今年度は子育てトークに参加している母親を対象として包括の周知を行っていくこととした。その母親達に、親とさらにその上の親(祖父母)の介護のことや、自身の介護予防のための体づくり、育児と全年齢の健康づくりを「わが事」として捉えてもらえるようなアプローチをしていきたいと考えている。今後、各地区へ巡回していく予定である。「自宅ですつとミーティング」は足掛け3年になり、声掛け模擬訓練を通し、認知症独居高齢者のことに取り組んでいる。昨年度取り組んだ地区での振り返りから、今年度は自主組織の中で他の住民へ裾野を広げ理解をしてもらおうという取り組みを考えており、その地区の住民誰もが実行できるような教材作りをしようという動きになっている。先日、第1回目の実行委員会を開催したところ、自治会の方から「自治会の部長→組長→班長→住民1人1人へと伝えていくのが良いのではないか。」との意見が出て、それに合った教材作りのための検討委員会を新たに立ち上げようということになった。

伴野委員: 圏域の状況として、昨年度の台風被害から災害時の課題があったことや、多機関連携が必須であることが書かれているが、それらについてどう取り組むかが計画の中ではわかりにくいので、記してもらう方が良いと思う。

港北包括: 個別ケースであればケア会議で関係機関と連携したり、勉強会や研修会で他機関と連携する機会を作っていくことを考えている。

小高委員: 「こしょく」にはいくつかの当て字があり「粉食」というものもある。1人で

食べる「孤食」をできるだけ減らすことと同じように、粉からできる食品ばかり簡単に摂取していると口の中の機能が衰え始めるため、そうならないように季節の移り変わりを感じ取れる身近な食材を摂取できるとよいと、歯科医師の立場から感じた。

港北包括：この取り組みについては、生活支援コーディネーターとの活動をイメージしていたが、歯科や栄養の専門職と一緒に取り組むことも考えていきたい。

瀧部会長：子育てトークとはどのようなものか。

港北包括：地区社協が実施している活動で、1～3歳位の子供の母親が集まり、子供をスタッフが見ている間に、母親が悩み事等を相談し合うというもの。地区により異なるが、概ね月1回開催されている。

## (2) 興津川地域包括支援センター（以下、「興津川包括」）

興津川包括：昨年度は、興津地区・小島地区の地区社協定例会や民生委員の定例会等に出席し、地域課題の把握や信頼関係の構築に務めた。また、圏域内のS型デイのボランティアスタッフや民生委員を対象に地域ケア会議を開催し、顔の見える関係づくりに務めた。多職種連携という点では、圏域内のケアマネ、薬剤師、福祉用具事業者等と協働し、事例検討や情報交換等を行った。今年度は、課題として挙げられている施設見学と福祉用具の勉強会について、まず、6月21日に小島の龍津寺で地域ケア会議と福祉用具説明会を行った。8月には特養白扇閣にて施設見学を兼ねた地域ケア会議を予定している。圏域内のケアマネとは、年度後半に予定している「自宅ですべてミーティング」への参画を促しながら連携を深めていく予定である。

丸山委員：計画に「見守りネットワークづくりを実施する」とあるが、ネットワークとして具体的にどのような形を考えているのか。

興津川包括：S型デイには各地区へ年何回か参加している。そこで、認知症なら寸劇を通して接し方を説明したり、高齢者虐待なら虐待とはどういうものかを説明して、ボランティアスタッフや自助・公助に関心がある住民との顔の見える関係づくり、信頼関係づくりを構築している。

丸山委員：ネットワーク作りに延長して、おそらく永遠の課題だとは思いますが、S型デイのような所にも全く関与できないような完全に孤立した家庭に対する見守りネットワークが何らかの形でできれば良いと思うので、今後そういった点も含めて検討していただけるとありがたい。

中村委員：地域ケア会議、事例検討会を積極的に行っている印象がある。ケアマネは事例検討会というと事例を出すのを嫌がる人も多いのではないかと思うが、その点は協力的に動いてくれるのか。

興津川包括：圏域内は居宅介護支援事業所の数が少なく3か所である。そのため（事例検討会への参加を）声掛けすると出ざるを得ないという状況であるが、事例の提出には積極的に協力してもらっている。

堀川委員：福祉用具勉強会を開催した経緯と結果、今後どうしていくかについて教えてほ

しい。

興津川包括：経緯としては、前年度から課題として挙がっていたため実施した。会場となった龍津寺は、以前から小島地区で子ども食堂や子ども寺子屋の活動をしてきたお寺で、非常に地域共生に積極的に取り組んでいた。また、その住職は昨年、社会福祉士の資格取得のために白扇閣へ実習に来ていた。そういったつながりもあり今回包括から龍津寺へ声をかけたところ、快諾を得た。地域住民も集まりやすい所で、せっかくならと福祉用具事業者、ケアマネも呼んで勉強会を開催する運びとなった。元々助け合いの精神が強い地域でもあるので、民生委員、S型デイのスタッフ以外の地域住民も多く集まり、福祉用具の話だけではなく、認知症の話や介護サービスの利用方法といった話も出て非常に盛り上がりを見せた。

瀧部会長：施設見学も福祉用具勉強会も、地域から声が上がって実施したということなので、とてもスピーディーに対応していると感じた。こういったところから、地域住民から信頼されるセンターになるのだろうと思った。福祉用具事業所には、リハビリ職として雇用されている人もいるので、そういった人を招くと、より状況に応じた福祉用具の説明もできるのではないかと思う。

### (3) 両河内地域包括支援センター（以下、「両河内包括」）

両河内包括：総合相談事業では、広報誌を年4回発行や、S型デイや地区社協、民生委員の定例会へ参加した際に包括の活動について周知していく。権利擁護事業では、8050 問題や精神疾患が関係する支援困難事例に関する相談が増えてきているため、適切な機関に繋ぐことで問題を速やかに解決していきたいと考えている。また、特殊詐欺に関する情報が多数寄せられており、S型デイで参加者へ必要な情報提供等を行い消費者被害を未然に防いでいく。包括的継続的ケアマネジメント事業では、圏域内のケアマネを対象とした障害の制度に関する研修会、精神疾患や虐待に関する勉強会を開催する予定である。介護予防マネジメント事業では、社会福祉施設の協力を得ながらS型デイ等でフレイル予防の啓発を行っていく。在宅医療・介護連携推進事業では、薬剤師の協力を得ながら薬に関する勉強会を開催することで医療と介護の連携を図っていく。生活支援体制整備事業では、2年前から行っているおむつバンクの活動を広報誌にも掲載し周知していく。認知症総合支援事業では、見守り活動に協力してもらえそうな団体や個人に認知症サポーター養成講座を受講してもらい、地域全体で認知症を見守る体制を構築したいと考えている。

小高委員：昨年度にオーラルフレイルのアンケートを実施したことに感心した。今年度はその成果を基にどういった取り組みをする予定か。

両河内包括：圏域内の福祉施設にいる歯科衛生士や管理栄養士に協力を得ながら、S型デイでフレイル予防の説明をしてもらう予定でいる。

隅倉委員：「ココバスの職員へ認知症サポーター養成講座を受講してもらった結果、認知症の心配があるような方がバスを利用された際に包括へ連絡が入るような

った。」とあるが、これは、地区から情報が包括へ入ることで助かっているということか。

両河内包括：その通り。ココバスが交通弱者の唯一の移動手段になっており、高齢者の利用が多いので、非常に協力を得られている。

中村委員：おむつバンクの現在の活動状況を聞かせてほしい。

両河内包括：実際はそれほど多くの需要がなく、大きな効果を感じるものとは至っていないが、活動自体が忘れられないよう広報誌に載せるようにしている。

伴野委員：両河内地区は高齢化が最も切迫している地区だと思うが、ネットワーク作りは非常にうまくいっていると感じる。ネットワーク作りで「こういうことをやっていると良い」というようなことがあれば、共有してほしい。

両河内包括：両河内地区も相互扶助の考えが強い地域であるので、そこが一番の要因ではないかと思う。

瀧部会長：ココバスは、高齢者の乗り降りが大変ではないのか。

両河内包括：ココバスの利用条件が「自分で乗り降りができる方」となっており、一昨年、乗り降りの講習会を開いている。

#### (4) 港南地域包括支援センター（以下、「港南包括」）

港南包括：高齢者人口の約 68%が認知症自立度Ⅱ以上で、認知症の診断を受けている高齢者が多い。また糖尿病や透析治療を受けている方も多いと聞いている。今後、病気の背景から圏域の生活課題を検討するとともに、認知症理解やフレイル予防の啓発活動を継続していきたいと考えている。昨年度の相談傾向から、独居高齢者のアルコールやパチンコ、買い物等への依存や精神疾患、物屋敷の問題の増加が見られた。今年4月以降も多くの支援が必要になった状態で相談に挙がるケースが続いている。早期の介入を目指し、繋いだ支援が滞らないように他機関との連携を強化するため、毎月の総合相談の内容・進捗状況を確認し、支援が途切れないようにしている。また、医療機関や地域から早期に相談に繋がるよう、既存のチラシを見直す予定。地区の課題を整理するため、令和2年度以降対応したケースについて、地区ごとに身体の状態や支援した内容を可視化し、相談傾向や個々の背景を捉える作業を行っている。もう一つ力を入れていることが、地域にある既存の社会資源の活用や新たな資源を見つけ出すことである。今年度から自立プラン型個別ケア会議で、生活支援コーディネーターやアドバイザーと既存の社会資源の活用状況と「地域にあったら」と思うものについて、定期的に情報共有することとした。清水地区では居場所の検討、浜田地区では浜田お助け隊に加え新たに買い物の移動支援を始めようという動きが出ている。入江地区ではオアシスカフェが定期的開催され交流の場ができた。

瀧部会長：昨年度の課題として、認知症とフレイル予防を啓発した後の評価ができていないということだったが、これに対して今年度の評価の予定はどうか。

港南包括：今年度の取り組みとしてまるけあ手帳の活用を検討中であり、リハ・パークや

その他リハビリの専門職と相談し、地域で開かれる健康講座やオーラルフレイル講座に活用できないかとアドバイスを受けている。また、包括の職員がまるけあ手帳を使いこなせないという実情もあり、まだ準備段階ではある。

伴野委員：総合相談や訪問件数が増加傾向にあるが、「総合相談から把握した高齢者情報に基づき、地区の課題を整理する。」とあるところをどのように整理して相談件数を減らせるのか、対応できるのか、教えてほしい。

港南包括：問題が複雑化して多様になってくるのが、船乗りや海の近くに生活している人の傾向でありことが見えている。清水では今後も漁業が衰退しないという点からも、船乗りの健康管理をしっかり行うことで今問題になっている事例が減っていくのではないかと考えている。また、医師会の中には漁業組合の健康診断を請け負っている医師がいるので、タイアップして健康相談ができれば、将来的に孤立や金銭面の問題が減るのではないかとみている。

瀧部会長：取り組みの効果がどうであったかの検証の方法に悩むところではあると思う。例えば、まるけあ手帳を配布して包括のことを周知した、その後相談件数が伸びた、ということであれば効果検証はしやすい。しかし認知症予防やフレイル予防の効果検証は、内容によってどういった結果を効果として取るかが難しい。例えば講座を受けた人達が自身でどれくらい予防に取り組んでいるかといったところを数字で評価できるとよいと思う。今年度、静岡型MC I改善プログラム普及事業が始まり、清水区ではテルサで行われている他、S型デイでの体験会も市内70か所で行われていくので、そこにどの位の人が参加するのかということも効果検証としては良いのではないかと思う。

#### (5) 岡船越地域包括支援センター（以下、「岡船越包括」）

岡船越包括：昨年度はコロナ渦で集団での活動が難しかった面もあったが、個別に様々な連携をとることができたと感じている。その中で地域課題を見つけることもでき、それを繋げていければと考えている。今年度は主に三つの重点項目に取り組んでいく。一つ目は、総合相談への迅速かつ正確な対応と終結である。これについては、数値目標として、90%程度その月内でできるだけ解決（方向性を見出すことが）できるよう受付している。ただ解決を急ぐということではなく、対応は丁寧に本人達の意向等尊重しながらも、解決をする上で一番必要な職員のスキルアップにも取り組んでいきたいと考えている。二つ目は、昨年度の台風15号の件を踏まえ、非常時に専門職や地域とタイムリーに情報共有できる連絡体制づくりである。三つめは、岡船越は地域活動が盛んな地域であるが、その人材をどのように確保し人数的にもどう維持していくか、ある程度の活動ができる水準をどう保っていくかという点で、地域の中でも課題になっているので、包括としてもそこを支援していきたいと考えている。その他にも、幅広く包括の啓発活動を行っていく予定である。

小高委員：「月1回の疑似総合相談に関するロールプレイを取り入れた研修」について詳しい説明をお願いしたい。

岡船越包括：利用者役、包括職員役、家族役といった配役を決め、例えば脳梗塞を起こした73歳女性からの相談や糖尿病の相談といった仮の相談内容を作り、包括の職員が実際にどう対応するか、実戦形式で行う研修方法である。

伴野委員：計画の中で、昨年度と比べて「増えた」「減った」ということに関しては、できるだけ数字で表した方がわかりやすいと思う。その上で二つ確認したい。一つ目は、今年度目標の①で「受けた相談の90%以上を1か月以内に終結させる。」とあるが、昨年度は何%だったのか。二つ目は、認知症カフェへの参加について、今年度はどうなのか。

岡船越包括：昨年度の1か月以内終結の割合は約60%である。今年度に入り、4月は60%程度、5月は73%程度となっている。認知症カフェには包括は毎年何らかの形で関わっているが、今年度も3回以上は出向く見込みである。ある程度定例的になものと捉えており、計画に記載することを敢えて省いた。

瀧部会長：人材育成とその人達をどう活用していくか、どの包括でも課題であると思うが、頑張ってもらいたい。

#### (6) 高部地域包括支援センター（以下、「高部包括」）

高部包括：地区社協、自治会、民児協等の団体との連携はこれまでと同様に取り組んでいく予定。顔の見える関係作りのためにも、各団体の定例会には最後まで参加することで、具体的な個別ケースの相談を受けることができればよいと考えている。医療、保健、介護、認知症、権利擁護の他、水害も含めた災害についてもやはり予防の大事さを痛感する。農家が多い地区で「枯れるように最期を迎える」と、予防に消極的な考えも聞かれる。本人の意向であればそれはそれでよいと思うが、家族の意向で本人の意向をつかめていないこともある。また、基本チェックリストで事業対象者としてサービスを利用できるレベルの人を、家族が介護保険の申請に固執するというケースもあり、包括として予防の視点での見立てをきちんとしていきたいと思っている。災害対応については、昨年台風15号被害のこともあり大きな災害にばかり意識が向いてしまい、今年6月の大雨による一部の冠水があったことで、個別の避難のことについては検討ができていなかったという反省があり、その点についても今後取り組んでいきたいと考えている。

伴野委員：相談件数、訪問件数ともに増えている状況で、今年度の取り組みは昨年度とほとんど同じであるように思う。今直面している課題に対して、今年はこう変化させて取り組むということが見えると良い。特に、顔の見える関係作りについては、それを続けるだけで相談件数が改善したり状況が好転していくのかどうか。また、都市部的な所は関係作りが難しいということを理解した上で、そこをどうやってうまく取り組んでいくかということが見えると良いと思う。

高部包括：ネットワーク作りは、3年任期の民生委員もあれば毎年替わる自治会役員もあるなので、やはり継続的にやっていかなければならない取り組みであると思っている。また、初動で受ける相談は地域からの相談が多いので、今後も一層ネ

ットワーク作りは地域に根付かせていかなければと思う。

丸山委員：「高部お助け隊」に対する包括としての具体的な支援内容を教えてほしい。

高部包括：包括としては「高部お助け隊」の実行委員会への参加の他、事務局が受けた依頼内容に福祉・介護の問題が含まれているとなった時に、包括に相談が入り一緒に対応することが多い。

隅倉委員：今年の台風 15 号の被害では、「高部お助け隊」に対してどんなニーズが多かったか。

高部包括：家屋が浸水したことで配偶者（同居者）が施設等他の場所へ移ったため、自宅で独居になった方が、話し相手が欲しいというニーズが何件かあった。

瀧部会長：今年度、静岡市在宅医療介護連携協議会のワーキンググループの中で、ACP の市民向けリーフレットの作成に取り組むことになっているかと思うので、包括でもそのリーフレットを有効活用して地域住民に啓発をしていってもらえたらと思う。

#### （7）飯田庵原包括支援センター（以下、「飯田庵原包括」）

飯田庵原包括：地区はS型デイが22か所あり介護予防に熱心な地域である。圏域の要介護認定率も清水区内では一番低い。一方で、90歳を過ぎても介護保険未申請で、家庭外に支援を求めたくないという理由から家族で大変な思いをして介護をしているケースもある。これらの特徴を踏まえ、包括業務や介護保険について広く周知していきたい。また、今年度はS型デイ全会場に参加し顔を合わせながら地域情報を収集、必要な家庭に必要なサービスの情報提供をしていくことを計画している。次に、昨年度は認知症に対する理解を広めるため、庵原地区の小中学生を対象に認知症サポーター養成講座、小学校での福祉授業を実施した。今年度は圏域の三つの小学校全てがS型デイでの高齢者との交流を計画している。地区社協からの依頼により「高齢者とは」「高齢者との接し方」をテーマに福祉講座を開催した。認知症高齢者をテーマにした講座については今後検討予定。介護者家族の会「いちごの会」は、今年度は対面実施を計画している。包括だよりは年3回発行しているが、6月に発行した災害備品チェックリストについて地区役員から全戸配布の提案があり、作成し直し今月下旬に配布予定である。（※資料として事前配布あり）

丸山委員：権利擁護事業について、「分からない事は専門職に聞いたり」とあるが、具体的にどのような専門職にどのように聞いているのか。

飯田庵原包括：分からない事は法テラスのホットラインで聞いたり、普段関わりのある司法書士に聞いたりして情報収集等行っている。他、成年後見センターにも相談している。

丸山委員：県弁護士会にも「なんでも相談箱」という支援職限定で相談できる制度もあるので、是非活用してほしい。

堀川委員：「いちごの会」の発足の経緯、福祉講座の対象を小中学校に絞っている理由は何か、講座を受けた小中学生の反応はどうだったかについて、教えてほしい。

飯田庵原包括：「いちごの会」は、認知症高齢者を介護する家族から、自分の思いを語り合ったり認知症に関する知識や情報を得たりする場が欲しいという要望を当時のセンター長が受け、立ち上がったと聞いている。福祉講座については、高齢者との交流の機会が少ないということで学校から依頼を受けて実施している。小学生は反応が良く、積極的に挙手し発言していた。

中村委員：子育て時期の方や小学生といった、一見、認知症とは関係がないような世代に対する取り組みはすごく良いと思う。また、本日配布された包括だよりは他の場でも活用してよいか。

飯田庵原包括：（包括だよりは）首相官邸のホームページや消防局等からの情報をもとに作成したものであり、他でも活用して構わない。

伴野委員：「災害時の持ち出し品目」は、本当にこれだけ必要かと疑問に思った。避難所にはある程度の備えがあることを前提に最小限にしておかないと実際は難しいのではないかと。その点を災害関係の専門家に確認してほしい。

飯田庵原包括：高齢者にとって、避難時は動きやすくなっている必要はあると思う。包括だよりに示している物の中から、家族や近隣と相談して準備していただきたいと思うが、内容については今後包括内でも協議していきたい。

#### （８）松原地域包括支援センター（以下、「松原包括」）

松原包括：自治会へ包括のちらし回覧を依頼し、病院や薬局、金融機関に対してはちらしを郵送した。各地区の会合では、包括の役割や気づきのポイント等支援の流れをわかりやすく紹介している。また、今年度はJAで出張相談が行えるよう調整中。主任ケアマネ連絡会では、今年度、障害分野の機関であるわだつみやは一とぼるを会場とし、そこの相談員にも参加してもらうことで連携強化を図る。圏域地域ケア会議は、昨年度挙げた三保地区のゴミ出し問題について取り上げる。現在、民生委員、自治会、居宅介護支援事業所に対しアンケートを実施しており、出た意見を基に会議を開催する予定である。また、折戸地区についても、異なる議題で同会議を行う予定。自立プラン型ケア会議は6月22日に1回目を開催し、2回目は9月21日に開催予定。再評価を行うことで事例提供への理解が進むよう働きかけている。認知症になっても安心して暮らせる地域づくりでは、昨年度折戸生涯学習交流館の講座として行ったため、今年度は他の地区で講座等が開催できるよう働きかけを行う。小学校における認知症サポーター養成講座は、社協と協同し開催の必要性を小学校へ働きかけたいと考えている。

瀧部会長：昨年度から引き続けている三保地区のゴミ出しの問題は、非常に喫緊の課題であると感じているが、具体的な話し合いの場は設定しているのか。

松原包括：年度当初は自治会、民生委員、ケアマネジャー、地区社協の企画委員会を集めて会議を行う予定でいた。しかし、包括は高齢者の課題として注目していたところへ、三保地区には大学もあり学生に対するゴミ出しの課題も挙がり、課題の集約が難しいという点が見えてきた。そのため、とりあえずアンケートを取



り、その中でできそうなことを小さい単位でプロジェクトチームを作って検討し、具体的なことを何か一つできたらいいのではないかという構想を展開しているところである。

(9) 有度地域包括支援センター（以下、「有度包括」）

有度包括：職員の対応力の向上と平準化については、ミーティングと月1回の進捗会議を行い、研修・会議には職員の偏りが無いよう出席していく。包括の周知については、郵便局や薬局等に声掛けをする等、パンフレットやUカードを活用していく。各専門機関との連携強化では、例年別々に行ってきたケアマネ連絡会と主任ケアマネ連絡会について、ケアマネ連絡会の企画・運営を主任ケアマネ連絡会で行うという方法に変更した。また、これまで作成してきた社会資源マップは、同連絡会と協同しモニタリングと更新を行っていく。生活支援コーディネーターとの連携については、自立プラン型ケア会議の後アドバイスを基に振り返りのミーティングを一緒に行い地域課題の抽出を行っていく予定。第1回の振り返りでは、困りごとを可視化する方法を話し合った。困りごとを可視化することで、有度お助け隊等に課題提供していければと考えている。その他、地域で行われているS型デイやテラスの活動と合わせ地区社協のミニ健康チェック等にも参加する。地域の要望を聞きながら認知症や介護予防の情報を発信していきたいと考えている。生涯学習交流館で行われている有度まちづくりベースにも参加し、「どんな地域になっていきたいか」という世代を越えた方の声を聞いていく。防災についても地域の情報を収集しながら包括しての取り組みを考えていきたい。

伴野委員：有度地区は高齢者数が一番多いにもかかわらず相談件数、訪問件数ともに横ばいでいるのは、人員体制等どういう点からこのような状況になっているのか。

有度包括：件数は数字の挙げ方の問題もあり、当包括では件数の集計を見直しているところであるため、今年度は数字が変わってくるのではないかと考えている。

中村委員：社会資源マップについて、計画書では「社会資源一覧」と記載されておりこれはマップではないと思うが、この更新活用状況のモニタリングが具体的にどのように行われているのか教えてほしい。

有度包括：これはどちらかと言えば一覧の方が正しいと思う。モニタリングは、ケアマネ連絡会の都度ケアマネジャーに聞いて活用状況を把握している。新しいものについては、その都度情報をいただいたり包括の方から「発信したりしている。漏れがないように情報の管理は包括で一元的に行っている。この一覧はグーグルマップで管理しているため、そのアドレスにアクセスすれば見ることができるが、上手く活用できる人とできない人がいる。

中村委員：ケアマネジャーがプランを作成する時には、インフォーマルサービス等社会資源の情報が本当に必要になってくるので、皆さんが活用できるとよいと思う。

瀧部会長：この一覧はケアマネ以外も見ることができる（アドレスやパスワードを教えてもらえる）のか。病院から退院する時にインフォーマルサービスが必要だと思

われる人がいる時にそういったものを見てみたいと思っている。

有度包括：可能である。ぜひ活用して、使い勝手について意見があれば教えてほしい。

(10) 蒲原由比地域包括支援センター（以下、「蒲原由比包括」）

蒲原由比包括：包括の周知活動は、銀行での広報、S型デイやシニアクラブでの健康相談・

PR、民生委員や地区社協等団体の会議への参加等で続けていく。住民向けの介護予防講座は、令和2年、令和3年と認知症に特化した内容を行ったため、昨年度はその参加者を対象にアフターミーティングを実施した。介護予防手帳を活用しその後の生活を確認していったが、講座に参加する前から意識していることについては講座でさらに根拠がついて継続できているが、新たなことに関してはなかなか続けられていないことを把握した。運動についても、いろいろな所へ参加している人は続けられているが、1人で行うとなると続かないということが認識できた。またこの中で、地域にS型デイではない、ただおしゃべりができる場所、相談しやすい場所があったらいいという意見もあった。そういったことを基に、今年度、ケアマネ連絡会の中で相談したところ、「元々住民同士の関わりが密なだけに認知症であることや障害があることを隠したいと思う地域のため、認知症カフェや家族会が継続できなかった」という流れがあることがわかった。そこで、気軽に相談できるという点で主任ケアマネの協力も得ながら、今年は試行的に介護者の集まりや住民の集まりの場に専門職が入ってみることを計画している。また、地域の活動できる場所という情報についても、今年度は収集していきたいと考えている。

伴野委員：相談件数が多くなっているのは、それだけ困難事例が多いということか。相談内容からの課題と、それに対してどのように取り組んでいくのか教えほしい。

蒲原由比包括：高齢化率が上がっているため、相談の中で簡単に解決しない困難事例も増えている。今まで家族の中で“柱”となっていた人が高齢になることで同居家族の生活が大きく崩れることになり、高齢者以外の分野の専門機関と連携する機会が非常に増えている。元々、いろいろな相談機関とつながっている家族の場合は比較的スムーズに連携できるが、障害ということを隠したいという思いで生活してきた家族をゼロの状態から相談に繋げ、世帯としての支援をしていくということで複数回同じメンバーで地域ケア会議を開くこともあり、相談（解決までに）が長引くケースもある。圏域内では障害の相談機関が隔月で相談窓口を開いているが、そこに相談に来ることも難しいということも聞かれており、課題が大きくなってから介入することも多いので、そういった点の理解を広める活動もしなければならないと思っはいる。

丸山委員：「地域の医療・介護・福祉等の社会資源や活動の場を共有・整理し不足する資源を検討する土壌を作る」とあるが、これは社会資源の一覧表を今後作っていくという意図であるのか。

蒲原由比包括：関係者の中で自分達の専門分野以外の情報をあまり知らないということがわかり、地域の社会資源をまとめることになった。介護の部分に関しては一

昨日、ケアマネ連絡会で共有している。実際に30数か所の事業所も連絡会に来て、自分達の強みや特徴的な取り組みをPRした。これを今後どう維持して更新していくのか、広報も含め来月の連絡会で検討していこうと思っている。また、住民レベルの社会資源は、生涯学習交流館のサークル活動や交流センターの予防教室もあるが、一般住民からは「健康のために自分がどういうことができるのかがわからない」という意見もあり、S型デイよりも手前の部分の情報不足していると感じている。住民の支え合いの活動も含め一般の元気高齢者も参加できる場の情報について、今後住民と共有する方法を検討しまとめることができたらよいと考えている。

瀧部会長：新たに求められる活動や居場所づくりを考えていく中で、課題にもある移動手段は非常に大きな壁となると思うので、その点についても一緒に解決していけるとよいと思う。

## 7 連絡事項

第2回清水区地域包括支援センター運営部会の日程について、令和5年10月12日(木)14時00分からと決定する。

## 8 閉 会